様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　３ 日現在

機関番号：１２７０１
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2021～2022
課題番号：２１Ｋ２０２２８

研究課題名（和文）肢体不自由者の将来を見据えたキャリア教育・職業教育に関する研究

研究課題名（英文）Research on Career and Vocational Education for the Future of People with Physical Disabilities

研究代表者
高野　陽介（TAKANO, Yousuke）

横浜国立大学・ダイバーシティ戦略推進本部・特任教員（講師）

研究者番号：８０９１０１５８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、実際に就労している肢体不自由者に対しアンケート・インタビュー調査を実施し、就労の実態を把握するとともに、就学時にキャリア教育・職業教育を受けた経験が、現在の就労においてどのように活かされているかを明らかにすることを目的とした。その結果、進路指導よりも、教科教育、部活動、社会人・職業人としての常識やマナーに関する学習が将来の生き方や進路を考える上で、役立つ学習であることが明らかとなった。また、ロールモデルの存在も重要であり、学生時代に同様の肢体不自由者がどのような進路を選択しているかを把握できることで進路選択に役立つ情報となることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
これまでに特別支援学校高等部に在籍していた肢体不自由者の就労状況や支援のニーズ、働く上での困難さ等について、わずかに実態調査が行われている。しかし、特別支援学校の卒業生以外の肢体不自由者の就労状況についてはこれまで明らかにされておらず、キャリア教育・職業教育を受けた経験が実際の就労場面で活かされているのかという視点での研究はこれまでにみられない。本研究により肢体不自由者が就労前に身に付けておくべき知識や能力について把握することができ、今後のキャリア教育・職業教育の授業内容、実施方法の改善につながるものであると考える。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to conduct a questionnaire and interview survey of people with physical disabilities who are actually working, to grasp the actual status of their employment, and to clarify how the experience of receiving career and vocational education during schooling is utilized in their current employment. As a result, it became clear that education in academic subjects, club activities, and learning about common sense and manners as a member of society were more useful than advice from others, such as career guidance, when considering how to live and what path to take in the future. It was also suggested that the presence of role models is also important, and that being able to understand what kind of career paths similar people with physical disabilities have chosen during their school years provides useful information for choosing a career path.

研究分野：特別支援教育

キーワード：肢体不自由　キャリア教育　職業教育

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

肢体不自由者（病気や怪我により手足、体幹の機能が損なわれ、日常生活動作に困難を及ぼす状態にある者）の就労による社会参加は難しい状況にある。平成 29 年度の特別支援学校高等部卒業した肢体不自由者 1856 名のうち、就職した者は 94 名（就職率 5.1%）であり、他の障害種を含む特別支援学校高等部の平均就職率 30.1%を大きく下回っている（文部科学省，2018）。また、インクルーシブ教育の推進により、特別支援学校ではなく小・中学校を卒業し、高校進学を経て、大学に進学する肢体不自由者も増えてきているが、教育から就労への移行が進まず、就職先が見つからないケースもみられる。やや年代が古いが、2011 年の日本学生支援機構の調査によれば、平成 22 年度の肢体不自由のある大学卒業生 325 名のうち約半数程度が何らかの理由で就職をせず卒業している状況であった。文部科学省（2011）は、肢体不自由者の就労に向けてキャリア教育（社会的・職業的自立のために必要な基盤となる能力等を育てる教育）や職業教育（職業に従事するための教育）を通して勤労観・職業観を育むことの重要性を指摘しているが、それらの教育の成果が実際の就労場面でどのように活かされているか検討した研究はほとんどみられない。

筆者は、高校に在籍する肢体不自由者の教育や支援の実態を調査し、卒業後を見据えた進路指導に課題があることを明らかにした。特に、就職希望者からはキャリア教育や進路指導が十分に行われないことにより就職先が見つからず、卒業後の生活に不安を抱えていたこと等が述べられていた（髙野・泉，2019）。しかし、肢体不自由者の高校生活をサポートする支援員からは、肢体不自由者本人のコミュニケーション能力や援助要請の仕方にも課題があることを指摘している（髙野・泉，2020）。肢体不自由の起因疾患や障害の程度、障害特性（運動・動作の困難さ、感覚認知の歪み等）、就学状況は多様であるが、実際に就職している肢体不自由者の教育経験や就労状況の実態を明らかにすることで、キャリア教育・職業教育の効果や改善点を検討していくことができると考えられる。

２．研究の目的

本研究では、実際に就労している肢体不自由者に対しアンケート・インタビュー調査を実施し、就労の実態を把握するとともに、就学時にキャリア教育・職業教育を受けた経験が、現在の就労においてどのように活かされているかを明らかにする。

３．研究の方法

本研究の目的を達成するため、以下の方法・手順で研究を進めた。

【１.アンケート調査】：肢体不自由と関連のある当事者団体、支援機関等に所属する実際に就労している肢体不自由者を対象としてアンケート調査を実施した。調査は、郵送形式で行った。調査項目は、①プロフィール（性別、年齢、家族構成、障害種、ADL（日常生活動作）、身体機能の状況、障害者手帳の有無、福祉サービスの利用状況、就学状況等）、②就学時のキャリア教育・職業教育について、③現在の就労状況と満足度、働く上で必要な支援、働く上での困り感等についての項目を設定した。分析方法は、選択項目は単純集計し、項目に応じてクロス集計等、数量的分析により行った。分析は、IBM SPSS Statistics 27.0.1 を用いる。記述項目は、KJ 法に準じた内容分析を行った。

【２.インタビュー調査】：アンケート調査の回答者のうち、協力の了承が得られた方にアンケート調査では十分に明らかにできなかった点についてより詳細に聞き取りを行った。インタビューは Zoom で実施した。質問項目は、アンケート調査の回答をもとに設定した。分析は、まずインタビューの逐語録を作成した。次に、意味内容により記述を切片化し、その内容を端的に示すラベル名を付与した。ラベルの類似性により、カテゴリーを生成し、カテゴリー間の関係性を結果図に示し、肢体不自由者に対するキャリア教育・職業教育の改善点を考察した。分析は、NVivo（質的研究支援ソフト）を用いた。

１，２の調査から、肢体不自由者の就労における支援状況、困難さ等について明らかにし、キャリア教育・職業教育で身に付けておくべき知識や能力を検討した。

４．研究成果

アンケート及びインタビュー調査から示された研究成果を以下にまとめる。

・これまでの学校生活の中で将来の生き方や進路を考える上で、役に立った学習や指導については、「国語、数学など、教科の授業」、「部活動などの課外活動」、「社会人・職業人としての常識やマナーについての学習」といった内容が挙げられ、頭や体を動かして身につけた知識や体験・経験的な学習が、現在の自身の就労に活かされていると感じていた。一方で、「教員の体験談」や「卒業後の進路についての相談」といった単発的な他者からのアドバイスは、あまり役に立たなかったという結果が示されていた。肢体不自由者に対する進路指導には多くの課題があるこ

と(進路に関する教員の情報不足、進路指導の機会の少なさ等)は筆者の過去の先行研究でも指摘しているが、引き続き進路指導のあり方については検討していかなければならない。
・学生時代を振り返り、キャリア発達の基礎的・汎用的能力である「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題、対応能力」「キャリアプランニング能力」の 4 つの能力について、自己評価してもらったところ、回答者の 4 割程度は、「自分の将来について具体的な目標を立て、その実現のための方法について考えることができた」や「学ぶことや働くことの意義について考えたり、学校で学んだことと自分の将来とのつながりが考えられた」といったキャリアプランニングに関する能力に対する評価が低い結果であった。学んだことが、将来にどのように活かされるのかを示した上であらゆる教育活動に取り組むことで、学習意欲を高め、進路選択に向けた興味関心を広げていくことができるのではないかと考える。
・今後、肢体不自由者が職に就き、働き続けるために、学校教育で重視してほしい、授業・指導や伸ばす能力について尋ねたところ、「コミュニケーション能力や人間関係の構築」、「専門スキル(IT、学問、芸術等)」、「職業体験・実習」、自己理解・説明(障害との向き合い方)」といった様々な課題が挙げられた。特に肢体不自由者の場合、働くことと本人の ADL が関連しているため、幼少期から青年・成人期までの間に、出来る限り可能なことを自分自身で取り組む“ 自立 ”に向けた意識の醸成が早期から必要不可欠となる。
・アンケート及びインタビュー調査から、将来の仕事を考える上で、自身と同様の障害の程度の肢体不自由者がどのような進路選択をしているのか、ロールモデルを把握できるとよいという意見が挙げられた。例えば、肢体不自由者の就労データベースを作成し、web などで幅広く公開することで、学校での進路指導の際に役立つツールとなるのではないかと考える。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 髙野陽介
２．発表標題 肢体不自由者へのキャリア教育・職業教育に関する実態調査
３．学会等名 日本特殊教育学会
４．発表年 2023年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関